

# 安息日に関する概念の時代的移り変わりによる余暇的意味

## The Idea of the Sabbath and its Meaning of Leisure through the Changes of the Times

金 玉泰 KIM, Oktae

● 西原大学校  
Seowon University



安息日, 余暇, 律法, 宗教改革, 清教徒

Sabbath, leisure, the Law, the Reformation, Puritans

### ABSTRACT

安息日に関する概念とその余暇の意味は、時代により移り変わりを繰り返してきた。神様の創造規約による、ユダヤ民族の律法的な「安息日」に対する概念は、キリストにより新しく解釈され回復した。しかし中世において安息日の概念は、再び律法的状況へと戻っていき、余暇の形態はありはするが大部分の余暇が禁止された。宗教改革者たちは、安息日を律法的束縛から解放させるなど教義的にもまた余暇の面においても、大きな意義を与えた。しかし清教徒の安息日の概念は、再び律法的概念に戻るのであった。現代、韓国の教会では、律法的な安息日厳守主義が非常に弱くなってきてはいる。更に、文化の発達と共に、余暇に対する理解は広まってきており、ボランティアが始まった余暇的意義を探することができる。大切なことは、安息日の重要な意味が人間のためにあるということである。私たちはキリストの模範を通し、安息日と余暇の価値を再認識しなければならない。

The idea of the Sabbath and its meaning of leisure has reiterated through the changes of the centuries. The concept of the Jewish Sabbath which focused on the law which was made by God's creation rule was newly interpreted and reformed by Christ. However, the Sabbath of the Middle Ages returned to the strict law, and while there was a form of leisure, the majority of leisure activities were prohibited. The Reformers broadened the meaning doctrinally through the liberation of the Sabbath from the restraints of the law, and in respect for man's life, dignity, and leisure. However, the Puritan's idea of the Sabbath again showed the recurrence of the law. In the present day Korean church, Sabbatarianism to the law has been weakening largely (strict observance

of the Lord's day has been emphasized now and then), but we can see the understanding of leisure has been expanding with cultural development. Most significant of all is the important meaning of the Sabbath for the individual, and we'll have to renew the Sabbath and value of leisure through Christ's example.

## 1. 序言

「サバト (Sabbath, 安息日)」という言葉は、「仕事をしない」という否定的な意味ではなく、「守る」「聖なる」という積極的な意味を含むようになったが (ジョテジン, 1995), 元々旧約聖書で神様が六日間の天地創造を行った後, 七日目に休み, この日を祝福, 聖別したところから始まっている。

なおかつ, この安息日はイスラエルの民がエジプトを出た (the Exodus) 後, 彼らに律法が与えられながら厳守するように, 他の九つ誡命と共に第4誡命として与えられた。そして, この誡命はイスラエル民たちの間に厳守され, その日を礼拝のための聖日としてだけではなく, 休息の日としても守らなければならないと命ぜられた (出エジプト記 20: 8-11)。

このように旧約聖書での安息日は, すべての事を中止し, 霊・肉・魂の領域で安息をとり, 饗宴と祭りがあり (Dawn, 1989), 余暇の面においても大きな意味を持っていた。また, Ryken (1989: 182-184) によれば, それは人間の仕事と貪欲に対する限界を確かにすることで, 余暇を強調しているのだ。余暇は生産の必要から私たちを自由にし, 代わりにもう作っておいたことを楽しむようにする。余暇は生産と消費の世界で, 私たちを束縛している公利主義者たちの主張から解放してくれる特性を持っている (金玉泰 a, 2002)。

ところが, 旧約聖書ではユダヤ人たちの律法的で厳格な安息日の概念は, 新約聖書のキリストを通して新しく解釈されるようになった。キリストは安息日制度の根本目的を示してくれることで, 安息日の表面的厳守による歪みを正し, 安息日の真の意味を明らかにしてくれようとしたのだ。またこの安息日は, 初代教会を通して, 中世・宗教

改革を経, 今日に至るまでに, その内容と意味は大きく移り変わり, 西欧を含めた世界すべてのキリストチャンたちに大きな影響を与えてきた。

今日, 私たちの社会は, 労働の倫理が支配する産業社会から余暇の倫理が支配する後期産業社会の段階へとなり, 個人の余暇生活は人生の質的満足という核心的問題のために頭を悩ませている。最近では余暇問題に関する爆発的な関心と共に多くの研究が報告されている。しかし, その中, 哲学的で根本的な, 特に神学的でキリスト教的な観点で成り立つことは, ほとんどない実情なのを勘案して, キリスト教の聖書と注解書を含めた関連文献を通し, 時代によって, この安息日に関する概念の移り変わりと余暇的な意義に対して考察して見ようとするのだ。

## 2. 安息日の起源と余暇

安息日の起源に関する問題はあまりにも複雑で, 今だに学界にどんな統一された見解はないが (Geller, 2005), イスラエルの民がかナンに入り, ガナンの農耕文化を受け入れたのと同時にカナンの宗教意識の中で少し踏襲したことと思うことができる (ジョテジン, 1995)。

イーミンギユ (2006) によれば, 遊牧社会で安息日厳守を行うということは, 現実的にはほとんど不可能であったため, 安息日概念がイスラエルに導入されたのは, カナン/パレスチナ居住以後, 遊牧社会から農耕社会に変わった以降となっている。

しかし, 旧約聖書では安息日制度を創造の規約はもちろんのこと, モーセの約束の象徴として表している。創世記 2章 2-3節には, 神様が天地万物を造られたその6日間の後, 7日目に安息したと記録されている。出エジプト記 20章 8-11節で

は、イスラエル民たちが6日間労働した後、1日安息の必要性を、「神様の創造の6日間と7日目の安息」と関連づけている一方、申命記5章ではイスラエルの歴史的な出エジプト出来事と関連づけている。

出エジプト記20章11節では、天地創造を6日間され、7日目に休まれた神様に参同するようにとし、すべての人に拘束力を持った第4誡命が、イスラエルの子孫たちに安息日を聖く守よう命じた。Beicher (1991: 33) によると、神様がモーセを通して与えてくれた「安息日の命令」は今日も変わらず永遠であり、安息日の永遠性は神様の創造に基づくものである。その命令は後のモーセの約束の象徴として役割を果たしたとしても変わることなく永遠なのだ。

神様は人間のように肉体があるわけではなく、その属性は、時間と空間を超越する霊なのだから、疲労を感じることはなく、人間のように休息や安息をもつ必要のない方だ。それにも関わらず、神様は天地創造を行ってから7日目に自ら模範を見せながら安息したことは、神様自身の為だというよりはイスラエル子孫たちの為で、ひいては、アダムと彼の子孫たちである全人類が、効率的に安息日を守る時、祝福を受けて神様の安息に入ってくるようにするためのなことというのだ (パクヒソク, 2002: 54-59)。

それでは、神様の安息において余暇はどのように示されているのか。Ryken (1989: 182-184) によれば、それは人間の仕事と貪欲に対する限界を確かにすることで余暇を強調している。余暇は生産の必要性から私たちを自由しその代わりにもう作っておいたことを楽しませてくれる。余暇は生産と消費の世界で私たちを束縛する功利主義者たちの主張から私たちを解放させてくれるという特性を持っている。

天地創造後、安息をもった神様から推論することのできるもう一つの事実は、安息がデッド・タイムや懈怠とは違うということだ。そういう安息は、喜びと満足という肯定的な特性を持ち、なおかつ、それは特に自然と芸術と美に対する静観 (contemplation) と係わっている。神様は創造

の働きを完了した後、「お造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記1:31)と言った。これは余暇について、観照的で審美的な面を認めているものと言える (金玉泰 b, 2002)。

また、神様の安息には気晴らしと再創造の特徴がある。出エジプト記31章17節には、「これは、永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。主は六日の間に天地を創造し、七日目に御業をやめて憩われたからである」と記録されている。ここでの神様の安息は、活動ではなく気晴らしの機能によって定義され、またその中から人間の休息と余暇のための神様のモデルを見ることができる。

### 3. ユダヤ人たちの安息日と余暇

安息日が確かにユダヤ教の一番重要な伝統となったが、トーラーでは安息日に対する原則だけが提示されるだけで、安息日を実際どのように守らなければならないかに関する具体的な規定を見つけることは出来ない。トーラーでは実際秋収禁止以外に3種程度の規定だけが制限されている。すなわち、安息日に火を起こしてはいけない (出エジプト記35:3)、荷物を運んではいけない (エレミヤ書17:21-22節)、そして旅行をしてはいけないなどが禁止された (イザヤ書58:13; 出エジプト記16:29)。

キリスト当時のユダヤ人たちは、特に宗教リダーたちは安息日を徹底的に厳格に守った。ユダヤ人たちの安息日は主に金曜の夕暮れ時から翌土曜の同じ夕暮れ時までであった。その間彼らは、一切の労働を中止した。彼らは旧約聖書に示された安息日厳守に関する規例よりも、もっと厳格に安息日を守ったのである。彼らは安息日に旅行することのできる距離を約1.1kmと制限したのだ。彼らは安息日に戦いが起こってもそれに参加しなかった (1 Macc 2: 31-38)。

クムラン共同体は、他のユダヤ教宗派よりも更に安息日をもっと厳格に守った。共同体の規範を記録しているダマスコ文書の10章15節から11章

20節では、安息日のタブー項目を詳細に示している。共同体員たちが移動することの出来る距離は約 500m しかなく、その上安息日に自分の妻とエルサレムで共に過ごすことすらできなかった (Larson, 1967: 37)。

パリサイ派の中では、安息日における 39 の禁止項目活動内容が Mishnah に詳しく示され (Mishnah Shabbat 7: 2), その分量は全て 24 枚にもわたりマルコによる福音書にも劣らない。Mishnah は 39 の禁止項目を示すだけでなく、これらを大きく 6 つにさらに細かく分けた。木に上がること、獣に乘ること、泳ぐこと、拍手すること、尻を打つこと、踊ることなども禁止された (ユサンソップ, 1998)。

初期のユダヤ文献に現われた安息日に関する研究は、既に Rowland (1999) によって詳らかに述べられている。ユダヤ文献によれば、安息日に関する極端な立場も存在していた。すなわち、前記で示した通り、戦いが起こっても安息日にはそれに参加しないという事実を利用し、異邦人たちが彼らユダヤ人たちを殺戮する事もあった。又、性行為さえも禁止したうえ (稀年書 50: 8), 安息日の規定を違反した際は死刑を執行しなければならないと主張する極端な集団も存在した (稀年書 2: 17-32: 50: 6-13)。

しかし、ユダヤ家庭においてこの日は、祭司長を除き誰でも仕事を休むことができる日であり、家族が共に過ごすことのできる日で、最高の良い食べ物を一日三食食べることができる祭りの日であった (普段の食事は一日二食だった)。安息日に対して厳格な文献である稀年書では、安息日は祭りの日としていたので、この日の断食を不当と見なした (稀年書 50: 10)。この日がユダヤ家庭において心待ちにされていた日であったという事実は、安息日に花嫁が来るという結婚の宴として描かれた多くのラビ文献の中でも立証されている (イーミンギユ, 2006)。

また、力仕事に苦勞した農夫と働き手たちにとって、安息日は休息と疲れを回復することのできる待たれるべき日で家族と一緒に過ごせる日でもあった。安息日だけは、王でさえも人々に仕

事をさせることのできる権限がなかった。この日、僕らの主人たちは食べる物を彼らに用意させることができず、自ら食べ物を用意するようという規定もあった。ユダヤ文化では、肉体的な休息は安息日の重要な要素だった (イーミンギユ, 2006)。

安息日に労働や商行為などを禁止させたことは、信仰的な面を持つだけでなく、道徳的な面も持っている。このような禁止された活動に参加する者は自分の欲望と財物への欲に心が動かされる。これらの活動を禁止することで、神様は人間の心の中に起きる終りのない欲望をコントロールすることを願っているのだ。今日においてもなお人間は、欲心のために神様が願う余暇を享受することができない。神様は靈的にも肉的にも真の安息を願っているのだ。

また、労働の禁止は、そのものが目的ではなく、積極的な活動のための手段であった。言わば、安息日にもイスラエル民たちはエリコ城を回った (ヨシユア記 6: 4, 16, 20)。サムソンの結婚の宴は安息日にももたれた (士師記 14: 12-18)。神殿を守る者たちは安息日にも任務交代を行った (列王記下 11: 5-9)。ソロモンの神殿奉獻祭りは安息日にも続いた (列王記上 8: 65)。安息日の人々は、神様のお話を聞いたり、神様に仕える者達に相談をするため彼らを訪問したりもした (列王記上 4: 23)。このような事実は、安息日に宗教的な活動などが集中的に行われていたことを物語っている (ユサンソップ, 1998)。

いずれにせよ、ユダヤ民族において行われていた安息日制度は、余暇的においても大きな意味を持っていたと言える。そこには真の休息があり、気晴らしのような回復がなされ、たとえ神様に対する宗教的な行為に限ると言っても積極的な活動があった。

#### 4. キリストと安息日と余暇

新約聖書の福音書では、安息日制度に係わるキリストの異なる二つの態度が記録されている。一つ目は、キリストは安息日には会堂の礼拝に必ず

参加したということ、二つ目は、キリストの安息日厳守慣行は宗教リーダーたちの目には批判を受けたということだ。

共観福音書には、キリストの弟子たちが安息日に麦畑を歩いている途中、小麦の穂を切り取り食べた出来事が出てくる（マタイによる福音書12：1-8；マルコによる福音書2：23-28；ルカによる福音書6：1-5）。パリサイ人たちが考えていた安息日の違反行為は、イスラエルの遺伝集である Mishnah にあるとおり秋取と脱穀に当たる項目であった。弟子たちが小麦の穂を切り取ることは「刈り入れる罪」となり、取った小麦を手で揉んで口で吹くことは「脱穀し簸る罪」で規定できる行為となるのだ（Blomberg, 1992：196；イーインファン, 199：41）。

共観福音書はこれらの状況におけるキリストの言葉を記している。各福音書によってキリストの言葉の内容の焦点は若干のずれはあるが、共通の内容は、ダビデと彼の仲間が神殿に入り、彼らが食べることでできない供えのパンを食べた事実とキリストが安息日の主という宣言だ。この事実は、キリストのために彼の弟子たちが、パリサイ人たちが安息日の違反と思う行動を行ったことができたということを暗示する。このような暗示は、「人の子は安息日の主なのである」というキリストの宣言の中にはっきりと現わされた（マタイによる福音書12：8）。

またマルコは別の観点から述べている。マルコによる福音書にだけ出る要素で、「人が安息日のためにいるのではなくて、安息日が人のためである」というキリストの宣言だ（2：27）。このような宣言を通して、キリストは安息日の主旨を歪曲させたユダヤ人たちの誤った安息日の厳守慣行をあからさまに批判したのだ。更に一步進んで、キリストは人道主義的な行いの必要が安息日厳守において、何よりも先行しなければならぬことを示した（Westerholm, 1992：719）。

また福音書には、安息日にキリストが行った多くの癒しの奇蹟が比較的詳細に記録されている。すなわち、カファルナウムの会堂で汚れた霊を追い出した出来事（マルコによる福音書1：21-28；

ルカによる福音書4：31-37）、手が瘦せた者の癒しの奇蹟（マタイによる福音書12：9-14；マルコによる福音書3：1-6；ルカによる福音書6：6-11）、腰が曲がっていた少女の癒し（ルカによる福音書13：10-17）、水腫を患っている人の癒し（ルカによる福音書14：1-16）、38年間病にかかっていた者の癒し（ヨハネによる福音書5：1-18）、物乞いをする先天的な盲人の癒し（ヨハネによる福音書9：1-41）などだ。

安息日にキリストが片方の手が瘦せた者を癒したことで、律法学者とパリサイ人たちはキリストを告発しようと機会をうかがっていたが、キリストは次のようなことを言って、その手の瘦せた者を癒した。「あなたたちのうち、だれが羊を一匹持っていて、それが安息日に穴に落ちた場合、手で引き上げてやらない者がいるだろうか。人間は羊よりもはるかに大切なものだ。だから、安息日に善いことをするのは許されている（マタイによる福音書12：11-12）」

このような出来事は律法自体に対する挑戦ではなく、善い行いが安息日において合法的であることということを主張しているのだ。パリサイ人たちは、特定の行為を律法を超越した行為だと定めたが、キリストは愛と親切の一般的な行為は、不法的でないとやっているのだ。すなわち、キリストが回復しようとする律法の本質は、人間に対する愛であることを見せつけることだ（金玉泰 b, 2002）。

特に、このような安息日のキリストの癒しの行為に対し、ユダヤ人たちとユダヤ宗教リーダーたちの目には、キリストが安息日の規定を破っているように見えた。そのため、パリサイ人たちは憤慨したのだ。しかし、福音書のどの箇所にもキリスト御自身が安息日の規定を破ったり犯すという考えをしているとか、また、福音書の著者らがキリストは安息日の規定を破ったと評価する箇所を探しても見つけることはできない（ユサンソップ, 1998）。

また、キリストはマルコによる福音書の次のような記事から見られるように、弟子たちにも安息日に対する、全く同じ生活方式を決めている（金玉泰 b, 2002）。

さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、えたことを残らずイエスに報告した。そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい。」と言われた。人の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った（マルコによる福音書6：30-32）。

福音書でのこのような箇所は、余暇を理解するのに非常に重要だ。これらの内容は、キリストが絶えず福音を伝え続けた生活の中でも、余暇を制限していなかったことを述べている。人としてきたキリストは、自分の任務を遂行しながら、神様に捧げる祈りと共に休息することのできる時間を必要としたように（マルコによる福音書1：35）、休む暇もなく伝道活動で疲れきった弟子たちにも、休息、すなわち余暇の必要性を知っていたのだ。

## 5. 中世の日曜／聖日と余暇

ユダヤ教が一週間の中で七番目日を安息日として守ったのに対し、初代教会では週の最初の日、すなわち日曜を「主の日」とし、キリストの復活を記念して、この日に集まり礼拝が行われた。この「主の日」という言葉が書かれ始めたのは、1世紀末からだった。しかし、このような変化は、一気に起こったのではなく徐々に広まっていった。ところが、パレスティナ教会では、ユダヤ教の影響が強かったため、これまでの安息日が相変わらず守られていた（佐藤，1988：123）。

コンスタンチヌス大帝によって、313年キリスト教は合法的な宗教と公認され、321年にコンスタンチヌス皇帝の勅令によって、日曜が祝日に制定、「日曜の安息」が可能な社会的状況となった。この時期は初代教会の伝統を受け継いで、安息日誠命の「安息」を霊的方式として理解した時代だった。クリソストムス（Chrysostomus）も真の安息を「肉体的な休息」ではなく、「霊的な休息」

と見た（Andrew & Conradi, 1912：428）。そして霊的な安息日の伝統は、アウグスティヌスから最高度で発展したが、アウグスティヌスの霊的な安息日教理は中世教会の前半期に相当な影響力を及ぼした（ユンサンウォン，2005）。

ラオディキア協議会（Council of Laodicea, 365）は、日曜を礼拝日と守るように教会法を最初に制定し、その後、日曜礼拝の参加を邪魔する多くの活動をも具体的に禁止した。すなわち、第4次カルタゴ協議会では、「日曜礼拝を無視して、劇場に行くこと」を禁止し、それを波紋される事で罪になることで判定した。第5次カルタゴ協議会（401年）では、「日曜に遊戯を楽しむこと」を禁止した。

第3次オルレアン協議会（538年）では、礼拝参加のための休を得るようになるために、コンスタンチヌス皇帝が制定した農業の日曜の作業までも禁止した。386年、西側皇帝バルレンティニアン2世（Valentinian II）と東側皇帝テオドシウス1世（Theodosius I）は、二つの法令を制定し日曜礼拝のために日曜の裁判と娯楽を禁止した（Andrew & Conradi, 1912：412-413）。

ユセビウス（Eusebius）は、日曜を「礼拝の日」と見なしたが、肉体的な活動を休む「安息の日」とは見なさなかった（Beckwith, 1978：76）。彼は、日曜と安息日を「無活動」という点ではなく、「安息日の祭司の活動」、又は「安息日の神様に礼拝を捧げる庶民の活動」という点において比較をした。それによると、安息日は「無活動」の日ではなく、「神様を自由に礼拝するために余暇を持つ日」であった。しかしここでの彼の主張は、「日曜の安息」は肉体的休息を受け入れてはいなかった、これが安息日厳守主義（sabbatarianism）の初期であり、限界だった。

一方、トレントの協議会（Council of Trent）で決まった教理は、「トレント協議会教理書（Catechism of the Council of Trent）」で体系化されたが、ここで中世のカトリック教会は、アキナスのスコラ的な自然法理論に根拠した安息日遵守主義をまた確認した。この教理書は、安息日誠命の文字の意味に根拠し、すべての肉体的なことを禁

止した。その理由は、そのことが悪いからではなく、それらが神様の礼拝を邪魔するからだ（ユンサンウォン，2005）。

このように、初代教会を経て中世に至り、旧約聖書の律法的で誠命的な点が廃止された安息日は、安息日厳守主義と共に、再び律法的状況へと戻っていった。そして、初代教会と中世における日曜（聖日）は、労働から解放されるなど一見余暇の姿を見ることは出来るが、休息は礼拝のためだけのものであり、踊り、歌、芸能、競技、旅行などの余暇的なことは一切禁止されていた。いわゆる「余暇の暗黒期」であった

## 6. 宗教改革者たちの安息日と余暇

宗教改革を通して、安息日の律法的で禁欲的な思想は再び衰退するようになった。スコラ哲学的な安息日厳守主義は、ルター（Luther）やカルビン（Calvin）のような宗教改革者たちによって、明確に廃棄された。彼らはおそらく、新約聖書の著者ら（おそらく使徒父たち）の見解に再び戻ろうとしたのであろう（金玉泰，2002 a）。

ルターの偉大な成果は、千年の間強固な城のように支持され続け、中世の安息日厳守主義と対立して、新約教会の安息日教理を聖書的な土台の上に建てたのだった。特に、ルターは安息日教理の代贖史的展開によって、霊的安息日伝統と安息日厳守主義の伝統を総合することで、安息日教理が神学的・実践的に完成の段階に立ち入るようにした（ユンサンウォン，2005）。

ルターは、肉体的な安息がキリスト人にとって必要な理由を二つ挙げている。第一に、リフレッシュのための肉体的休息の必要性である。「肉体的回復のため、人々が時折り休む日を一日持たなければならないということは、自然法の要求だ」というのだ。第二に、神様への礼拝のための余暇の必要性である。ルターによる肉体的休息の目的とは、教会に集まり礼拝を捧げ、神様の話を聞き、共に祈りを捧げるためということであった（ユンサンウォン，2005）。

ところで、ルターは肉体的休息を義務的事柄と

しては見なかった。「安息日に休む必要のない人は、安息日に働いて他の日に休むことができる」と言った。肉体的安息とは、必要な人が自由に享受することができ、強制的に与えることができないというのだ。また安息の厳守をとっても偏狭的に適用し、不可避な事まで禁止しないようにした。彼はキリスト人の自由を抑圧する、「厳格な安息日厳守主義」を反対した。

カルビンもルターと一緒に、中世の安息日厳守主義に反対し、「アウグスティヌスの霊的な安息日伝統」を改革教会の基本的立場において確立した。彼自らが著した、「キリスト教綱要」によると、「安息日はキリストの中で成就された。したがって廃止されたという事実は確かである」と述べている。もちろん、彼はキリスト人が礼拝のために、特定の日に、規則的に公式の集まりを持つという点においては、安息日の制限的な機能がキリスト人に相変らず適用されているという点を明らかにした。しかし、カルビンは、「この礼拝日が必ず日曜（聖日）でなければならない必要はない」ということを言明した（ヤンヨンイ，2000：480）。

カルビンによれば、安息日の真の厳守というのは、単純に「肉体的な休息」ではなく、「真の自我否認（不義と邪悪、貪欲と悪行の全てからの中止）」であったのだ。また安息日制度はイスラエル民にとって市民的秩序だっただけでなく、彼らの僕たちに休息の日を与えるための政治的秩序であり、慈悲の法として人道主義的な思いやりだった。なおかつ、カルビンは、「第7日」というのは、指定された日だけ廃止するのではなく、「7日の週期で一日を区別する原理」まで廃止すると見なした（ユンサンウォン，2005）。

結局、ルターやカルビンなどの宗教改革者たちは、安息日に関しても、人々を中世の安息日厳守主義や律法的束縛から解放させて、自由を享受することができるようにするなど教義的に貢献しただけでなく、人間尊重と身体的休息の必要を理解するなど、余暇的な面においても大きな意義を与えたと言える。

## 7. 清教徒の安息日と余暇

17世紀イギリスの清教徒たちは、カルビンの継承者であるにも関わらず、安息日教理においてカルビンとは全く異なる立場をとった (Park, 1994)。そして遂に彼らは、宗教改革以前の安息日厳守主義へと戻ってしまった。

清教徒たちの安息日厳守主義は、以前の安息日厳守主義よりも更に厳格で、決意論的な立場である「ウエストミンスター信仰告白書」・「ウエストミンスター要理問答」・「ウエストミンスター礼拝模範」にはっきりと反映されている (ヤンヨンイ, 2000 : 481)。

清教徒の安息日厳守主義は、ニコルラス (Nicholas) によって最初に推し進められ、その後、ウエストミンスター標準により、清教徒の安息日教理として公的に確定されることとなったが、16-17世紀になるとあまりにも怠慢化したイギリス教会が姿を現わし始めた。そのため清教徒の安息日教理は、「神学的な発展の産物」と言うよりは、「実践的必要性による発展の産物」というものであった (Bauckham, 1982 : 323)。

16世紀イギリスのキリスト人たちは、聖日礼拝を終えると、残りの時間を娯楽とスポーツで楽しむなどして過ごした (Packer, 2001 : 329-330)。また、エリザベス一世の時代には、イギリス教会の中で聖日に労働と娯楽を制限させようとする関心が高まった。その一つの例として、1562年イギリス教会の聖職者たちは聖日の飲酒、劇場見物、賭博、トランプ、乗馬などを禁止することを要求した (ユンサンウォン, 2005)。

これに対して、1618年ジェームズ一世 (James I) は「スポーツの本 (Book of Sports)」を著しその中で、聖日にも各種スポーツ、娯楽や踊り、そしてトランプまでも楽しむことを許され (キムガンチエ, 1994 : 118)、1633年には、チャールズ一世 (Charles I) がこの宣言を公布した。これらによって、イギリス教会の聖日厳守は、更に怠慢化した (Packer, 2001 : 331)、そして、国王たちの「スポーツ宣言 (Declaration of Sports)」は、清教徒たちにさらなる刺激を与えることとなった。

国王たちのスポーツ宣言によって、「聖日の厳守のための運動」は、むしろ教会と議会から強い支持を受けるようになった。そして聖日の労働、スポーツ、娯楽などを禁止する一連の法令が制定されることになった。この期間に、有名なウエストミンスター標準 (Westminster Confession of Faith; Larger and Shorter Catechism) が承認されたり、「ウエストミンスター信仰告白」と「大要理問答」及び「小要理問答」が採択されたりもした (ユンサンウォン, 2005)。

清教徒の目的は、「聖日遵守を安息日誠命の文字の意味通り、行うように厳命すること」と「聖日を安息日と同等な神的制度とする」という主張であった。そのため、清教徒は三側面の彼ら独特の安息日教理を発展させた。すなわち、清教徒は安息日制度を「創造規例」とし、自然法の根拠を自然理性ではなく創造規例と見なすことを原則として受け入れ、礼拝日変更の根拠を「新しい創造としてキリストの復活」に置いた (ユンサンウォン, 2005)。

結局、清教徒において最も強調されることは、安息日の禁慾的な性格だ。安息日である日曜日には、娯楽を行うことに反対して、主に礼拝と休息を行うことを主張した。したがって、清教徒の安息日厳守主義は、教義的に律法的状況へと再び戻り、遊びは否定され、力仕事から休息という余暇の意味を取り揃えていると言うが、自由と選択という余暇の本質に照らして見ると真の余暇とは言えないであろう。彼らには、安息日としての余暇はあったが、娯楽としての余暇はなかった。つまり祭りはあったが遊びはなかったのだ。

## 8. 現代韓国教会の聖日と余暇

前章で述べた、清教徒主義の禁慾的な安息日厳守主義は、現代に来てかなり減退したと言える。今日の物質的な豊かさは、相対的に宗教的関心を弱らせ、余暇活動に人々の目を向かせている。現代は、聖日厳守において危機の時代とまで言われている (金玉泰 b, 2002)。



しかし現在韓国内で一番大きな教団である韓国キリスト教長老会（合同、<http://www.gapck.org>）を含む、各教団の総会憲法の中の「小要理問答」と「大要理問答」によれば、安息日（聖日）は聖く休み、娯楽は止め、礼拝をするためにその日を捧げなさいと教えている。もちろん、今日教団の総会憲法に規定されている安息日厳守主義は、かなり弱まってきてはいるが、牧師によっては、清教徒的な禁慾的安息日厳守主義、又は、聖日遵守をいまなお強調することもよくある。

そして、ヤンヨンイ（2000：485-486）は、韓国の長老教会が、二律背反的に、自分たちの信仰と生の絶対的標準になる聖書（特に新約聖書）や、彼らが全ての教会史を通して、一番信頼するに値する神学者として認めるカルピンの安息日の理解より、彼らの批判の対象ではなければならないことで期待されるスコラ哲学的な安息日厳守主義に、もっと近い、安息日／聖日神学を発展させて行くようになったと批判した。

神様が安息日を憶え聖く守りなさいという命令は簡単明瞭だ。しかし多くのキリスト人たちは、まるでパリサイ人が安息日について悩んでいたように、安息日を聖く守る問題について深刻に悩んでいる。パリサイ人は、神様の御言葉に基づき数百種の行動守則とタブー事項を立て、これらを守って来たのだ。神様が安息日を立て守りなさいと命令する目的は、決して私達人間に苦しい思いを与えになるためではなかった。パリサイ人のように、行動綱領を項目別に決めておき、安息日を正しく守るということは愚かな事だ。聖書が語る安息日の意味をしっかりと理解しそれらを実生活で実践するために努力する真剣な姿勢が必要だ（ジョングッジェ、1993）。

ユサンソップ（1998）も「私たちがキリストに学ぶことのできる聖日厳守の原理は、キリストの安息日の癒しによく反映されている」と述べ、「聖日厳守において、私たちが聖日に何をしてはいけないのかということより、何をしなければならないのかに焦点を置かなければならない」と言った。今日、韓国の教会の関心は、聖日に力を尽くして「何をしなければならないか」にはなく、キリス

ト当時のユダヤ人たちに「禁止されいた行動をしない」ということに、安息日厳守の焦点を置いたように、何をしてはいけないのかに必要以上の関心を置くため、聖日遵守が負担であると認識されているというのだ。

また、教団の総会憲法の「要理問答」の他にも、「礼拝模範」の6番では、「…公式礼拝を終えた後…病人を訪問し、貧しい者を救済し、無学な者を教え、信仰のない者に伝道をし、敬虔であり、愛をもって、感謝される事を行うことが正しい」と記録されている。これは満足感を通して得る自由と選択という余暇の本質から脱し、やや義務と責任を従うことだが、ボランティアとしての余暇的な意義を捜すことができるであろう。

今日の教会は、良くも悪くも、急速に変化する時代環境を回避することは出来ない。今日の発展した文化は、それらを利用した宣教方法が脚光を浴びようになり、大きな効果を現わしてきている。スポーツや舞踊、音楽、映画、演劇などが宣教活動の現場で広く利用されているのだ。また身体の健康に対する関心と共に余暇に対する理解も広がってきている。このような現象は律法的で禁慾的な安息日を弱化させることに違いないだろう。

## 9. 要約及び結論

神様の創造規約により、ユダヤ民族における律法的で誠命的であった「安息日」に関する概念は、キリストによって新しく解釈され回復した。以後、初代教会時代を経て、中世と宗教改革そして現代に至るまで、時代によって安息日に関する概念は移り変わりを繰り返して来たが、それに伴い余暇的な意味も変化を繰り返して来た。

新約聖書で、キリストは自らが安息の模範を示し、旧約聖書での律法的で厳格な安息日を廃した、更に、人間愛を通して安息日制度の根本目的を私達に見せてくれることで、安息日の表面的な遵守による歪みを正し、安息日の真の意味を明らかにしようとしてくれたことで、私達は余暇を正しく理解したと言える。しかし、初代教会以後、宗教

改革が起こるまでに、中世の安息日概念は、再び律法的状況へと戻っていった。したがって、初代教会と中世においての日曜（聖日）の様子は、労働から解放されるなど一見余暇の形態を見ることはできるが、それは礼拝を守らせるための強制力をもったものであり、真の余暇活動の大部分は禁止されていた。

しかし、16世紀に起こった宗教改革が、安息日と余暇において多くの変化と回復を与えることとなった。ルターやカルビンなど宗教改革者たちは、安息日に対する律法的な拘束から人々を解放させ、自由を享受するよう働きかけるなど教義的に貢献しただけではなく、人間尊重と余暇の必要性を理解させるなど余暇の面においても大きな意義を与えた。しかし、清教徒における安息日は、教義的に律法支配へと戻っていき、以前よりも増して厳格な安息日厳守主義へとなっていったのである。

今日、韓国の教会は時代的環境変化により、律法的な安息日厳守主義が非常に弱くなってきていると言えるが、清教徒的な禁慾的安息日厳守主義、又は、聖日遵守が強調される場合も多い。しかし、文化と健康に対する関心が高まると共に、余暇に対する理解は広まってきており、聖日（日曜）のボランティアも勧奨され、ボランティアとしての余暇的な意義を探ることができる。

このように、安息日の概念は時代により移り変わって来たが、何よりも大切なことは、安息日の重要な意味は「人間のためである」という事実である。中世の律法的で禁慾的な思想や清教徒の厳格な安息日厳守主義には、問題点があったに違いない。したがって、私達はキリストの模範を通して分かるように、安息日に禁じられた行動をしないことに力を注ぐ、「安息日に拘束された者」になるのではなく、積極的な活動に関心を集中させ、安息日（日曜）を通し、身体的・精神的・社会的・霊的健康のための、「余暇的な価値」を新しくすることが神様の御心にならなければならないのだと言えるであろう。

## 参考文献

- Andrew, J. N. and Conradi, L. R.(1912). *History of the Sabbath and First Day of the Week*. Washington: Review & Herald Pub.
- Bauckham, R. J.(1982). "Sabbath and Sunday in the Protestant Tradition" in *From Sabbath to Lord's Day*. Grand Rapids: Zondervan. 311-341.
- Beckwith, R. T.(1978). *The Christian Sunday*. Grand Rapids: Baker book house.
- Beicher, R. P.(1991). *A Layman's Guide to the Sabbath Question*. Southbridge, M. A.: Crowne.
- Blomberg, C. I.(1992). *Matthew, The New American Commentary 22*. Nashville Tennessee: Broadman Press.
- Davies, H. (1999). キムソクハン訳. 清教徒礼拝. ソウル: キリスト教文書宣教会.
- Dawn, M. J.(1989). *Keeping the Sabbath Wholly*, Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- Geller, S.(2005). "Manna and Sabbath: a literary-theological reading of Exodus 16", *Interpretation* 59, No 1, Ja. 5-16.
- ゴシンソク(2000). 聖書に現われた安息に対する正しい理解. 高麗神学大学院碩士学位論文.
- ヘッシエル, A. J. (2002). 森泉弘次訳. シャバット. 教文館.
- イーインファン(1999). 安息日と聖日に対する聖書の考察. キリスト神学大学院大学校碩士学位論文.
- イーミンギユ(2006). 社会学的視覚で見たマイ福音書に現われた安息日. 新約論壇, 第13巻第1号. 1-28.
- ジェジャウン編(1992). グランド総合注釈(12). ソウル: 聖書教材刊行社.
- ジョテジン(1995). 安息日と聖日. KRF研究結果論文. 93-105.
- ジョングッジェ(1993). キリスチャンと安息. ソウル: 月刊教育教会.
- 金正俊(1967). イスラエル信仰と神学. ソウル: 聖文學舎.
- キムカンチエ(1994). 近代・現代教会史. ソウル: キリスト教文書宣教会.
- 金玉泰(1997). 余暇とレクリエーション. ソウル: 21世紀教育社.
- 金玉泰 a(2002). 安息日の変遷と余暇. 第40回韓国体育学会学術発表会論文集. 21-27.
- 金玉泰 b(2002). キリスト教安息日と余暇. 韓国体育哲学会誌. 第10巻2号. 31-46.
- Larson, M. A.(1967). *The Essene Heritage*. New York: Philosophical Library.
- 日本聖書協会(2001). 聖書. 日本聖書協会.
- Packer, J. I.(2001). バッグヨンホ訳. 清教徒思想. ソウル: キリスト教文書宣教会.
- 朴允善(1978). 創世記注釈. ソウル: 靈音社.
- Park, H. S.(1994). "Historical Background of the Sabbath theology in Puritanism". 總神大論文集.

- パクヒソク(2002). 安息日と聖日. ソウル:クリスチャンダイジェスト.
- Roeland, C.(1999). "A Summary of Sabbath observance in Judaism at the beginning of the Christian Era" in D. A. Carson(ed), *From Sabbath To Lord's Day*. Eugene, Oregon: Wipe and Stock Publishers. 44-56.
- Ryken, L.(1989). *Work and Leisure in Christian Perspective*. Inter-Varsity Press.
- 佐藤敏夫(1988). レジャの神學. 新出版社.
- チェウンス訳(1991). 世界教会史. ソウル: 総神大学出版部.
- Van Dallen, Deobold B. & Bennett, Bruce L.(1971). *A World History of Physical Education*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc.
- Westerholm, S.(1992). "Sabbath", In *Dictionary of Jesus and the Gospels*, eds. J. B. Green and others. Downers Grove: IVP.
- ヤンナッコソ(2000). キリスト教綱要(初版). ソウル: クリスチャンダイジェスト.
- ヤンヨンイ(2000). イエスと安息日そして聖日. ソウル: イレ書院.
- ユンサンウォン(2005). 安息日教理の歴史: 初代教会から清教徒まで. 総神大学校大学院碩士学位論文.
- ユサンソップ(1998). イエス様と安息日. 總神大論叢, Vol. 17. 49-78.  
<http://www.gapck.org>